

麦作情報 No.1

令和4年1月11日
西松浦農業改良普及センター

1. 気象概況

月	半旬	平均気温		最高気温		最低気温		降水量		日照時間	
		平年値	本年値	平年値	本年値	平年値	本年値	平年値 mm	本年値 mm	平年値 時間	本年値 時間
12月	4	7.0	7.1	11.7	10.7	2.6	3.5	12.2	39.0	16.8	9.0
	5	6.7	7.8	11.5	14.2	2.2	3.2	11.3	1.5	17.6	27.7
	6	6.2	4.5	11.0	7.1	1.7	1.7	11.8	1.5	22.0	13.4
1月	1	5.8	4.2	10.5	10.4	1.4	-0.7	9.2	2.0	17.6	25.8
	2	5.7	5.7	10.1	12.5	1.5	-0.1	10.7	1.0	16.0	27.6

- 平均気温は、12月4～5半旬は平年並み～1.1℃高く推移し、6半旬～1月1半旬以降は1.6～1.7℃低く推移し、その後は平年並みとなった。
- 降水量は、12月16日に37.5mmのまとまった降雨があったものの、それ以降はほとんど雨が降っていない。12月の降水量は平年の67%とやや少なくなっている。
- 日照時間は、12月は平年の101%で、1月も平年より多く推移している。

2. 生育概況

- 令和4年産麦の播種盛期は、11月中旬～11月下旬となった。
- 本年は、11月22日に36.5mm、11月30日に34.5mmのまとまった降雨があり、雨の合間を縫っての播種となった。11月下旬に播種された圃場では、播種後の気温は平年並み～やや低かったものの、土壌が湿潤状態であったため、出芽は良好であった。

《麦類の生育状況（1月11日時点）》

- ① 11月18日頃に播種された圃場では、現在本葉5葉目が展開中（4葉期）
- ② 11月27日頃に播種された圃場では、現在本葉4葉目が展開中（3葉期）
- ③ 12月上旬頃に播種された圃場では、現在出芽はじめ（1葉期）



3葉目が展開中の麦（間もなく追肥の時期を迎える）

3. 今後の管理

幼穂形成始期（麦 5.5L～6.0L 頃）

1) 肥培管理

- 播種時期により管理が異なるため、下記を参照にする。
※地力がある圃場（堆肥連用田など、令和3年産麦で倒伏した圃場等）では、麦の生育量および葉色から判断して施用量を減じるなど調整を行う。

①11月18日頃播種

→追肥の時期を迎えている。暦通りの量を施用する。

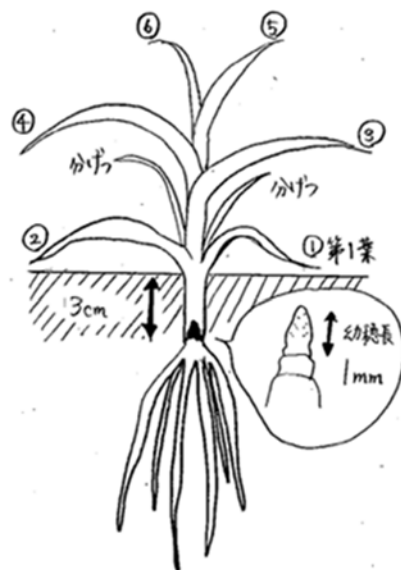
※大豆あとの圃場については、麦の生育を見て施肥量を調節する。

②11月27日頃播種

→3葉期を迎えている。1月中旬をめぐりに追肥を施用する。

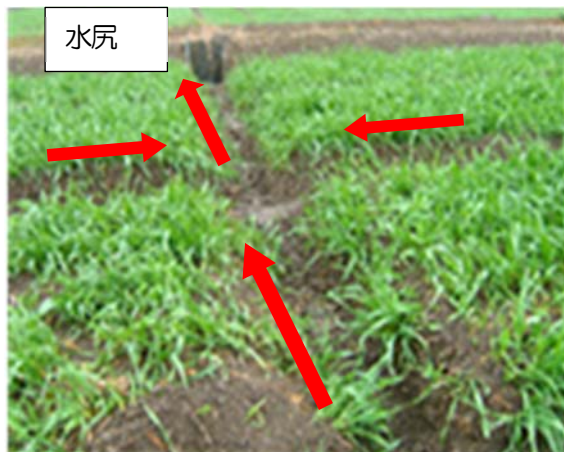
③12月上旬播種

→まもなく出芽揃い期を迎える。3葉期を迎え次第追肥を実施する。



2) 排水対策

- 麦類の発根力は、最高分げつ期～節間伸長期（概ね7～8葉期頃）が最も高いとされている。根の活力維持のためにも、排水対策を確実にを行う。



- 2月以降は、降水量が多くなる場合があるため、早めに額縁明渠や水尻へつなぐ溝の整備を行う。
- 溝（畦間）をまくら地までとおし、排水力を高める。
- 暗渠排水が整備されている圃場では、コルゲート管の栓が確実に開いているか確認を行う。

排水溝の整備の実施により、麦の根の活力維持に繋げる！！

3) 麦踏み、土入れ

麦踏みの効果： 耐寒性の増加 根の伸長促進 早立ち防止による凍霜害回避など

- 必ず圃場が乾燥した状態（畝間が白乾している状態）で、麦踏み（3葉期以降から）や土入れ（5葉期以降から）を実施する。
- 特に、早播きにより生育が進みすぎている圃場では、幼穂凍死を回避するためにも、麦踏み作業を10日間～2週間の間隔で多く実施する。
- 土壌水分が高い状態で麦踏みを行うと、土がしまり湿害による根痛みを起し、生育阻害につながる。今後降雨があった場合は、土を手で握り、湿った状態であれば、無理な麦踏みは避ける。

○茎立ち期以降は、茎折れや穂の裂傷につながり、穂数減となるため、麦踏みは行わない。

4) 雑草防除

- 水稲刈り取り後雑草が繁茂していた圃場、耕起前の防除が不十分であった圃場では、スズメノテッポウ、カズノコグサ、タデ類、トゲミノキツネノボタンなどの発生が散見される。
- 土入れによる雑草防除を実施するとともに、こまめに圃場の雑草発生状況を把握し、除草剤の処理時期を逸しないよう対策を徹底する。
- 除草剤効果を保つため、雨前を避けて散布する。(天気予報を確認してください)
- カラスノエンドウは収穫時に混入する危険性が高いため、毎年発生している圃場や、すでに発生がみられる圃場では、アクチノール乳剤による防除を徹底する。
- 「ハーモニー75DF 水和剤」の使用時期は「播種後～節間伸長前まで」なので、使用の際は麦の生育状況に注意する。カズノコグサの防除は播種直後処理剤と「ハーモニー75DF 水和剤」(カズノコグサが1～3葉期までに)との体系処理で行う。近年増加しているトゲミノキツネノボタンについても、同様の防除とする。

<カズノコグサとスズメノテッポウの識別法>

- 「根の色」で簡単に識別できる。
『カズノコグサ』の根は、『スズメノテッポウ』に比べるとやや「白色」。

	種子の形	根の色
カズノコグサ	ハート型 	白色
スズメノテッポウ	粒 	赤褐色



<トゲミノキツネノボタンの特徴>

- 2枚目以降の葉は浅い切れ込みが入る(写真左)
- 4月～6月にかけて黄色い花をつける(写真右)
- 除草剤について、アクチノールよりもハーモニー75DF 水和剤の効果が高い。



★除草剤散布後は、以下のことに注意する★

- ①「麦踏み」は、除草剤散布後に薬剤の影響で葉が黄色くなっている場合、麦へのダメージが大きいため、散布後1週間は控える。同様の理由で、麦踏み直後の除草剤の散布も控える。
- ②「土入れ」を、除草剤散布後すぐ行くと、雑草の蒸散作用が抑制され有効成分の根部吸収が妨げられるので散布後1週間は土入れを控える。(特にステージの進んだ雑草の場合は十分に間隔をあける)

○播種後除草剤が散布できていない圃場や、雑草の発生がみられる圃場では、除草剤の処理時期を逸さないように早めに茎葉処理剤を施用する。

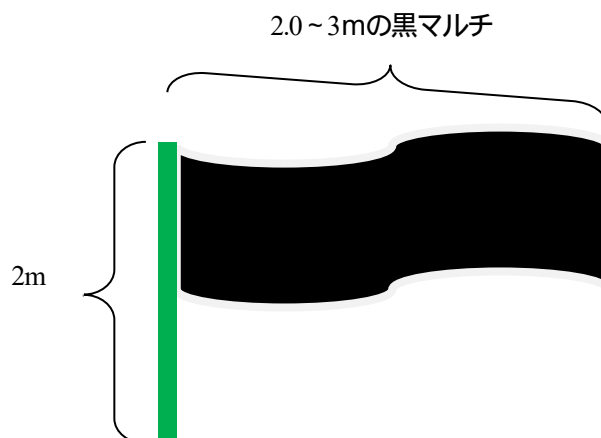
農薬名	効果のある雑草	使用量	希釈水量	使用時期	総使用回数	使用上の注意事項
ハーモニー75DF 水和剤	イネ科雑草 ・スズメノカタビラ ・カズノコグサ 広葉雑草 ・ヤムグサ ・アサ ・ハコ ・トゲミナソバ 等	5～ 10g /10a	100L /10a	播種後～節間伸長前 ※カズノコグサに対しては、 麦1葉期～節間伸長前	1回 以内	<ul style="list-style-type: none"> ・播種後にハーモニー細粒剤 F を散布された圃場では使用できません。 ・薬害が生じやすいので周辺作物への飛散に注意。 ・使用器具の洗浄を入念にし、他作物との併用はしない。 ・スズメノカタビラ、カズノコグサには効果が弱い（抑制するが枯死しない）
アクチノール乳剤	広葉雑草 ・ヤムグサ ・カズノコグサ ※イネ科雑草には効果がない	100～ 200ml /10a	70～ 100L /10a	穂ばらみ期まで (雑草生育初期)	2回 以内	<ul style="list-style-type: none"> ・広葉雑草多発田に使用し、ヤムグサ、カズノコグサに効果が高い。 ・湿度に左右されず使用できる。 ・散布後、20日程度で枯死。 ・接触剤なので、必ず雑草の茎葉に散布する。 ・気温が高い日の散布は薬害が生じるので注意が必要。

5) 鳥獣害対策（カモによる食害）

- ・近年、11月播種された麦（用水路や川の横の圃場など）において、カモによる食害が見られる。
- ・カモによる食害は、麦の地際部まで草刈機ではらったようになる。
- ・カモ害の対策としては、「のぼり」や、「テグス」などの方法が効果的であると言われている。
- ・効果的な『のぼり』の設置方法は、2mの支柱に、2.0 ～ 3.0mの黒色のマルチをつるした「のぼり」を、10aあたり5本均等に設置する方法である。



※「のぼり」は、マルチの長さや支柱の高さが短かったり、10aあたりの「のぼり」の本数が少なすぎると効果が低減する。（費用は、「のぼり」1本あたり約450円）



6) 酸性土壌による障害

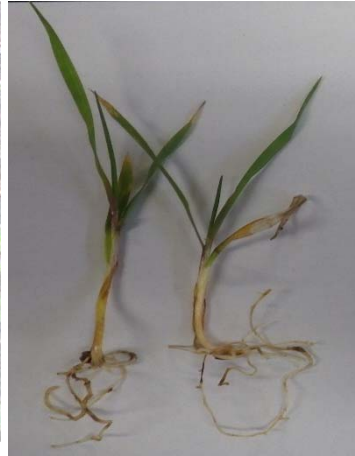
- 1月下旬頃に大麦の下葉の黄化が目立つ場合、酸性障害の可能性はある。

酸性障害の場合、生育期間中に石灰資材を施用しても、麦の生育改善への効果はあまり期待できない。

(過去、土壌pH4.8の圃場に消石灰を100kg/10aあたり施用したが、大きな効果はなかった)

次年産以降にその圃場で大麦を栽培する際には、土壌pH測定を行い、必ず石灰資材の施用を行う。

※その圃場で、夏作に大豆を栽培する場合も必ず酸度矯正を実施する。



根の活性や量にも大きな違いが見られる



土壌pH 4.8

pH5.2

R4年産麦類生育期間気象グラフ

アメダス観測値 (伊万里)

西松浦農業改良普及センター

